

即，実践！ 小児の下部尿路機能障害の診療

企画にあたって

小児の下部尿路機能障害では、頻尿、尿失禁、尿勢不良、尿路感染症などが受診契機となることが多い。このため、彼らは日常の泌尿器科外来にやって来る。小児下部尿路機能障害での受診はめずらしいものではなく、泌尿器科医である限り避けては通れない。小児下部尿路機能障害の原因は、先天的な解剖学的・器質的疾患、二分脊椎症、脳性麻痺などの神経因性によるもの、さらには神経疾患がない小児特有の行動異常などで起こる非神経因性下部尿路機能障害など多彩である。一方、排尿自立が確立される4～5歳までは、患児の排尿状況が病的であると判断されにくい場合も多く、小児ならではの診療アプローチも必要となる。

小児下部尿路機能障害のなかには、難治性尿路感染や腎機能障害のリスクがあるものが存在し、先天性腎尿路異常（congenital anomalies of the kidney and urinary tract : CAKUT）を合併している場合は、AYA（adolescent and young adult）世代以降に末期腎不全に陥ることも少なくはない。このような先天性尿路器質性疾患においては、すみやかに診断を行い、適切な外科的治療が望まれる。

最近の研究で、尿失禁を認める子どもたちは、自分をダメな子だと卑下する傾向にあり、教師も彼らをできない子としてみていることが報告されている。また、いじめにもつながることも知られている。このようなことから、小児下部尿路機能障害は、医学的問題に加え、彼らの成育にも影響する社会的問題と成り得る。本疾患は、小児期の問題のみならず、腎機能障害、排尿障害などと成人期への移行問題も含まれることから、多くの泌尿器科医に理解いただきたい疾患でもある。

小児の下部尿路機能の診療においては、小児であるが故 randomized control study が少ないため、ガイドラインがほとんど存在しない。しかしながら、最近ではエビデンスレベルが高い論文も増え、本領域においてもエビデンスに基づく診療が確立されつつある。本特集では、日常の泌尿器科外来で診る小児の下部尿路機能障害について、この1冊で対応可能となるよう内容を構成し、日ごろの臨床に役立てていただけるようにした次第である。

佐賀大学医学部泌尿器科学講座

野口 満